

〈目次〉

はじめに 1

論文1——自由民権革命家

田代栄助……………15

1. 「本陣崩壊」の疑問
2. 田代栄助の実像を求めて
3. 蜂起が目指したもの
4. 第五回尋問調書を読む
5. 皆野への進軍を考える
6. 田代の胸痛と下小川橋陣地
7. あり得ない本陣崩壊
8. 広域蜂起
9. 自由党解党と秩父事件

論文2——目指すは岩鼻火薬製造所……………77

1. 金屋の戦い
2. 目指すは岩鼻火薬製造所
3. 群馬県上・下日野村の人々
4. 紫頭巾の隊長

論文3——困民党軍自由隊と群馬県上・下日野村……………99

1. 新井多六郎の活躍
2. 自由隊の村
3. 日野村周辺諸地域の動き

論文4——謎の電報……………121

1. 謎の電報
2. 電報の四人
3. 東京浅草草鶴鳴堂（かくめいどう）で繋がる二つの革命事件
4. 困民党の拠点、神ヶ原村

論文5 — 広域蜂起……………	153	論文7 — 加波山事件と秩父事件 — 民権結社明巳会と世界遺産『高山社』 —	215
1. 新田騒擾事件		1. 明巳会と高山社	
2. 人見山騒擾事件		2. 激化状況と明巳会	
3. 群馬県緑野郡根小屋村、山名村の動き		3. 加波山事件と高津仲次郎	
4. 激化諸事件と秩父事件		4. 秩父事件と明巳会	
5. 連絡員の派遣		5. 民権学校発陽学舎	
論文6 — 自由党の村 坂原村法久……………	183	6. 高山社蚕業学校と秩父事件	
1. 群馬県坂原村法久		7. 民選議院設立の意見書を提出した大戸甚太郎	
2. 福島事件、加波山事件と法久		8. 「自由自治元年」の盟約	
3. 新田騒擾事件と法久			
4. 出稼ぎ者の活躍			
5. 新井平蔵と法久の動き			
6. 法久会議と自由党解党			

論文 8 — 首魁 小柏八郎治と影の巨魁 折茂健吾… 253

— 世界遺産高山社と事件に参加した高山社の人々 —

1. 首魁 小柏八郎治
2. 「小柏さま」と困民党軍菊池隊
3. 世界遺産「高山社」
4. 秩父事件に参加した高山社の人々
5. 小柏氏と市川氏
6. 小柏八郎治と郡長折茂健吾
7. 影の巨魁、郡長折茂健吾

秩父事件年表 289

各論文が提起すること 294

資料「上毛今昔物語」 298

参考文献等 304

あとがき 307

あとがき（新たな地平を目指して）

秩父事件について知りたがっている人がいるから、行って教えてやってもらえませんか。そんな依頼を受けて、日野地区のあるお宅を訪ねたのは平成も終わりに近いある年のことであった。

尋ねたその家はその苗字と場所から秩父事件に参加し、しかも遠く長野県まで転戦した困民党軍兵士の子孫の家であることがすぐに分かった。きつと先祖の生きざまに触れたい。先祖の偉業について知りたい。そんな思いで私を呼んだものと思った。しかし、質問は意外なものだった。「昔、随分貧乏をした時代があつて、秩父まで稼ぎに行つたんだそうですね」「秩父で稼いだ金で大尽になつた家があるようですが、本当ですか」

いったいどんな話をすれば理解してもらえるのか、何から話をすればいいのか。しばし、言葉が出なかった。もしかするとこの人は自分の先祖がこの事件に参加したことも、菊池貫平率いる一隊に加わつて長野県まで遠征したことも知らないのではないか。そんな思いがよぎった。教科書にも載る歴史的事件であつたこと、自由民権運動の中で起こつた事件であることなど、一通り話してみたが、この人が語り伝え聞いていた秩父暴動とは結び付かないようであつた。最後に、椋神社における決起から参加し、最後まで戦い抜いたうちの一人であることを伝えた。

が、やはり嬉しそうな表情は見せてはもらえなかった。

秩父地方では、人々が事件を先祖の誇りとして語り始めて久しい。長野県の佐久地方でもやはり先祖が自由民権運動の中に身を投じたことを誇りに思っている。それに比べて悲惨ともいえるようなこの地域の状態はいったい何なのか。どうしてこんな状態になってしまったのか。改めて戦前の暴徒史観や戦後の研究顕彰運動の誤りの深刻さを感じた。

しかし、本論集をまとめる作業の中で新たに疑問に感じるようになったことがある。それは「暴徒」「暴動」とするこの事件に対する見方は果して本当に戦前の歴史観や戦後の顕彰運動が原因なのかということである。もしかしたら、地域の人々自ら、あるいは秩父事件参加者自らが作り出したのではないか。そう感じたのである。本論集で明らかにしたことの一つに、困民党総理田代栄助の背後に群馬県西毛地域を代表するような豪農たちが隠れていた、という事実がある。論文3で示した小柏八郎治、論文4に登場する黒沢円造、論文6の新井平蔵らである。彼らは何代にもわたって営々と築き上げてきた政治的経済的力と地域の人々からの信頼によって地域の経済を支え、人々の生活を支えていた。もしも、捜査の手が迫れば地域はどうなってしまうのか、その思いはこれら豪農たちだけではなく、地域の人々全体の恐怖だったのではないだろうか。「困民党」や「困民党による事件」を強調し、生活に窮した貧しい人々による事件、

とすることによりこれら豪農たちへの疑惑の視線は逸らすことができる。「暴徒」「暴動」はこうして自らが作り出したものではなかったのか。そういう思いに至ったのである。

地域の行政のトップにいた郡長の折茂健吾も郡書記の大戸甚太郎もまた八郎治や新井平蔵らと同じ民権家であった。もしも事件後の捜査が豪農層にも及べば、それはやがて自身の身辺に及んでくることを意味する。また、自由党を捜査の対象とすればこれもまた同じことである。彼らは血縁関係で結ばれた親戚であり、学問で結ばれた学友であり、民権思想でつながる同志であり、何よりも新たに生まれた高山社によってつながった養蚕の友でもあった。

自らを、そして地域を守るには「自由党の事件」ではなく「困民党の事件」に、豪農層が糸引く事件ではなく生活に窮した貧民による事件に、藤岡地域の事件ではなく、秩父の事件に。こうして「暴徒」「暴動」が生まれ、「秩父暴動」となったのではないか。そのように感じたのである。

もう一つ生まれた疑問がある。それは豪農層と警察のつながりはなかったのかということである。論文8において鎌田警部の次の出張経歴を紹介した。

「上州南北甘藷ノ各村モ兼テ気脈ヲ通シ居リ同郡内ニテハ小柏八郎（上州多胡郡上日野村小柏常吉ニ当ルヘシ）ナル者大勢ヲ率ヒ岩鼻ノ監獄ヲ破リ四五百人ノ囚徒ヲ救ヒ出シ」

ここでは、小柏八郎（治）を小柏常吉、つまり小柏常次郎と誤解し、以後八郎治の名前が警察資料から消えている事実を紹介しその結果、事件の真の巨魁を取り逃がした旨の説を展開した。これに関する疑問である。つまり、鎌田らは本当に誤解したのだろうかという疑問である。それは、西上州はおろか、秩父地方にまで隠然たる力を持つこの人物を事件の首領として捜査対象にしたら、いったいどんな事態になってしまうのか、という彼らの恐怖が八郎治を資料から消したのではないか。つまり、八郎治を捜査対象から外すために、誤解を装ったのではないかということである。この説は、今のところ資料が少なく私の思い付き的な推論ではない。新たな史料の発掘と分析を期待したいところである。

本著を含め、私の近著三冊の出発点は、田代栄助の供述に相当の虚偽があるのではないかと考え始めたことに始まる。田代をはじめとする一部幹部の供述を真実の証言として、その上に研究を積み重ねていくことは、鏡に映された別の世界を見て、それを見ながら絵を描いているようなものである。正反対の姿、あるいはまったく別方向を描かされていたのである。そうして描かれたのが「秩父事件」であり、「秩父困民党」であった。本著『藤岡・秩父自由党事件』をきっかけに新たな研究の世界が開けることを願っている。